

あ お た や ぶ さ め 粟生田氏と流鏑馬

角山八幡神社の由緒

粟生田氏は、角山八幡神社（小川町角山）の祭礼で、流鏑馬を主催してきた一族である。角山八幡神社は、元弘3年（1333）、峯山（小川町角山小字峯山）に移住してきた粟生田氏が勧請したのが起源であり、明暦2年（1656）、周辺の五社を合祀して現在地に移転したという。その祭礼で奉納された流鏑馬は、粟生田氏を中心とした宮座の形態が残されており、中世に遡及する神事だった可能性が高いと思われる。しかし、こうした角山八幡神社の由緒は、真偽が十分に検証されていないため、従来は伝承の域を出ないものとして認識されてきた。そこで、粟生田氏の政治的な実態を確認しながら、角山八幡神社で行われていた流鏑馬の由来などを考察してみたい。

鎌倉期の粟生田氏の実態

粟生田氏は、児玉党の一族で、武蔵国入間郡粟生田郷（坂戸市粟生田）を本領とした東国武士である。ただし、粟生田氏に関する記録は少なく、その政治的な動向には不明瞭な点が多かった。『法恩寺年譜』の関東下知状写によれば、元応2年（1320）、「粟生田彦太郎直村」の妻が、武蔵国入間郡小代郷（東松山市正代）の田地を小代氏から購入している。粟生田直村の一族は、所領の買得などを通じて、児玉党の小代氏とも提携していたのである。また、これまで注目されてこなかった史料として、建暦2年（1212）、「玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書」に署名した「有道正行」が挙げられる。この人物は、児玉党の有道姓を称しており、実名も系図と一致するので、粟生田氏の正行に比定できるだろう。粟生田正行は、法然の一回忌に造立された阿弥陀如来像に結縁しており、鎌倉前期から浄土宗の信者として活動していたのである。このように、粟生田氏は、武蔵国の入間郡を本領としながら、広域的なネットワークを展開する武士だったと推定される。

鎌倉幕府の滅亡と粟生田氏

角山八幡神社の由緒によれば、粟生田氏の一族は、元弘3年（1333）、鎌倉幕府が滅亡した時期に、小川町の地へ移住してきたという。これは、粟生田氏が、幕府の滅亡を契機として、この比企郡の地を獲得したことを意味するのではないか。元弘3年（1333）5月、新田義貞を主体とする倒幕軍は、上野国の生品神社で挙兵すると、武蔵国の軍勢を糾合しながら、鎌倉に向けて鎌倉街道上道を進撃した。そして、鎌倉で攻防戦が繰り広げられた結果、北条高時を中心とする幕府は崩壊して、後醍醐天皇による建武の新政が開始された。粟生田氏は、武蔵国の御家人だったが、新田氏の軍勢に動員されて、幕府を打倒する戦いに身を投じたのだろう。こうして、恩賞として建武政権から小川町の地を安堵されたと推定される。このように、幕府の滅亡による社会的な混乱は、武蔵国の政治秩序も激変させて、粟生田氏を当地に定着させる要因になったのである。

粟生田氏と流鏑馬故実

では、角山八幡神社の流鏑馬を、粟生田氏の活動と関連づけることは可能だろうか。鎌倉期の粟生田氏をみると、流鏑馬と関係の深い武士だったことが指摘できる。『実躬卿記』によれば、正応4年（1291）5月、「粟生田五郎左衛門尉有道行能」が、新日吉小五月会の流鏑馬で、一番の立役として勤仕している。粟生田行能は、京都の新日吉山王宮で、祭礼の流鏑馬に参加していたのである。新日吉小五月会の流鏑馬は、京都社会の武士を動員して奉納される神事で、鎌倉後期には六波羅探題が主導する行事に変容していた。粟生田氏は、在京して六波羅探題に祇候することで、本場の流鏑馬に触れる機会を持っていたとみられる。とすれば、粟生田氏は、新日吉小五月会に参加した経験を活かして、角山八幡神社にも流鏑馬の神事を導入したのではないだろうか。

角山八幡神社の流鏑馬

このように、角山八幡神社の由緒は、粟生田氏の実態とも符合しており、一定の史実が反映されていたと判断できるだろう。粟生田氏は、元弘の乱で幕府が滅亡したのに伴って、小川町の地に所領を獲得した武士であり、新日吉小五月会などの故実を一族で共有して、地域社会でも流鏑馬を主催するようになったと推察される。角山八幡神社の流鏑馬は、昭和27年（1952）ごろに途絶えて、現在の祭礼では実施されていない。しかし、もともと東国武士の粟生田氏に由来する

神事であり、中世以来の由緒を誇った伝統行事として評価することができるだろう。